
タキタロウ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タキタロウ

【Nコード】

N7664D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

幻の魚タキタロウが本当にいると主張する拡樹。彼はそれを証明する為に何としてもタキタロウの魚拓を取ろうとする。そうして悪戦苦闘していくうちに。

第一章

タキタロウ

本当にいるのかどうかわからない。伝説での話だった。

「あんなのいねえって」

「何でそんなの信じるんだよ」

「いや、絶対いるんだって」

藤崎拓樹は否定する皆にあくまでこう主張する。かなりムキになつて。

「俺は見たんだからな、あの池で」

「見たのかよ」

「ああ」

きつぱりとした口調で彼等に答えた。

「俺のこの目でな」

「本当かね」

「さあ」

だが皆信じようとしない。それにはちゃんとした理由もあった。

「あのな、御前あの魚は」

「伝説って言われてるじゃないか」

そう拓樹にも言った。

「いるのかどうかわからないっていうか」

「いないだろ、やっぱり」

「何でそう言えるんだよ」

しかし拓樹はそれでも言い返す。さらにムキになっていた。

「いるに決まってるじゃないか」

「それで御前が見たのは」

「あの湖だよな」

「ああ、そうさ」

ムキになつたまままた言い返す。

「すごい大きな魚がな。跳ねたんだよ」

「ふうん。大きなねえ」

「鯰かライギョじゃないのか？」

そうした魚もまたかなり大きい。だから彼等もそう言ったのだがそれでも菰樹の言葉は変わらないのであった。あくまで自分の目を信じていた。

「違うさ。そういう魚だって散々釣ってきたしな」

「どうしてもそれだっていうんだな」

「ああ、タキタロウだ」

彼はその魚の名前を言った。

「間違いない、タキタロウだよ」

「本当かね」

「信じられる話じゃねえよな」

それでもクラスメイト達の言葉も考えも変わらない。どうしてもであつた。

「じゃあよ、藤崎」

「ああ」

そのクラスメイト達の言葉に応えた。

「御前タキタロウ釣ってみろ」

「魚拓持つて来い」

そう彼に対して言うのだった。

「そうしたら信じてやるよ」

「魚拓があればな」

「ああ、わかった」

彼もそれを受ける。しっかりとした顔と声で答えるのであった。

「じゃあ釣つて来るぞ。それでいいんだな」

「ああ、待つてるぜ」

「本当にいたただけれどな」

「だから本当にいるんだ」

彼は意固地なまでにそう主張するのだった。

「絶対にな。それを見せてやるさ」

「まあ待ってるぜ」

「そういうことだな」

こうして拡樹はその魚タキタロウを釣ることになった。意を決した彼は一人でまずは普通のルアーを持って行くのであった。それで釣るつもりであった。

湖のほとりは静かで緑の木々が生い茂っている。湖は青く澄んできてまるでエメラルドとサファイアが光沢だけなくしてそこにちりばめられているようであった。奇麗でそれでいて澄んだ風景がそこにあるのであった。彼はそこにやって来たのである。その手にルアーと魚拓の道具を持って。

第二章

「見てろよ」

一人で湖のほとりに腰を下ろして言う。

「この俺の手でな。タキタロウを」

釣るつもりであった。そうして糸を下ろして暫く経った時であった。

「!？」

ルアーに反応が来た。これまでにない大きな感触だった。

「来た、あいつだ!」

拡樹にはわかった。確信していた。間違いなくタキタロウだと思った。それで急いでルアーを引き釣り上げる態勢に入った。

しかし力は強い。拡樹は立ち上がって踏ん張るがそれでも引き込まれそうになる。それに耐えながら何とか釣り上げようとするが遂には。糸の方が負けてしまったのであった。

プツン、と大きな音を立てて糸が切れてしまった。糸が切れてしまい踏ん張る先がなくなった拡樹はそのまま後ろに倒れてしまった。どう、と倒れて尻餅をつく。そうしてそこから何とか起き上がりながら湖の方を見る。だが湖はまるでそんな彼の努力を嘲笑うかのようにならなうにそれまでと変わらぬ平穏なままであった。

「駄目だったんだな」

「ああ」

翌日そのことを皆に話す。ふてくされた顔で。

「駄目だったよ。今日また行くさ」

「今日もか」

「ああ、今度はな」

彼にも考えがあった。それを皆に対して告げる。

「もつと糸を太くしてルアーも強いものにしてな」

「それでやるんだな」

「そうさ。それで今度こそ」

ふてくされた顔が何時の間にかあの強い顔になっていた。意を決した顔に。自分で言っているうちに乗ってきたようである。

「釣ってやるさ」

「まあ頑張れ」

「今日もな」

「ああ。それじゃあな」

今度もまた意気込んで湖に向かった。しかし結果は。

「……………くそっ」

またしても湖のほとりで尻餅をついてしまった。当然ながら糸は切れてしまっている。タキタロウの力は彼の予想を遥かに越えていたのであった。

「またか。こうなったら」

彼は諦めなかった。それどころか余計に燃え上がっていた。その気迫を胸に。次の策を考えるのであった。

大きな罾を湖の中に入れたのは次の日であった。魚を餌で釣って捕らえる罾である。家にあったものを持って来たのだ。これで今度こそ捕らえるつもりだったのだ。

「これでよし」

その罾を湖の中に入れて会心の笑みを浮かべていた。

「この罾ならあいつだって」

その日はそれで帰った。次の日にはまた学校でクラスメイト達に話すのであった。罾を仕掛けたことをである。今度こそという自信に満ちた声でだ。

「今日湖に行くさ」

「それで今度こそタキタロウが捕まっているんだな」

「ああ、今度は間違いない」

胸を張ってさえた。

「罾になら幾ら何でもな」

「まあ相手は魚だからな」

「頭はこっちの方がいいんだしな」

「だからだよ」

彼は胸を張って言うのだった。

「絶対に捕まるさ。今度こそ」

「魚拓の用意はしてあるんだよな」

「勿論」

これにも胸を張って答えてみせた。

「当然だろ、約束なんだからな」

「ああ。しかしよ」

ここでクラスメイトの一人がポツリと言うのであった。

「何だよ」

「いや、御前二回も馬鹿でかい魚に負けてるんだよな」

「ああ」

そうなのだ。二回も糸を切られている。それが何よりの証拠であった。

「それってつまりは」

「ああ、そうだよな」

他のクラスメイトもここで気付いたのだ。そのことに。

「つまりそれってな」

「やっぱりあの湖にいるんじゃないのか？」

「だからいるって言うてるだろ」

拡樹にとっては何を今更といった感じであった。口を尖らせて皆に対して言った。

「絶対にな。だから魚拓を取ってやるんだよ」

「いや、いるんだったら」

「なあ」

だが彼等の言いたいのはそこではなかったのだ。ここで拡樹と彼等の間にズレがあった。しかし拡樹はそれには気付かないのか構わなかった。

第三章

「だから。魚拓を取ってやるんだよ」

「いるんだろ？」

「だったらもう」

「いるのは最初からわかっているんだ」

彼の反論はこうであった。実はそれはもう彼の中でははっきりとしていることであつたのだ。しかし魚拓はそれとはまた別のことであつたのだ。

「だからな。魚拓を」

「おい」

そんな彼をクラスメイト達が止めるように声をかけてきた。

「だからいるんだろ？タキタロウ」

「だったら」

「いるからだよ」

言葉が噛み合わない、クラスメイト達はこう感じたのだが彼は違つていた。何もかもをまったく疑わない目ではっきりと言つのであつた。

「だから魚拓をな。取るんだよ」

「そうなのか」

「ああ、絶対にな」

そのはつきりとした声でまた皆に告げた。

「取ってやるさ」

「何かそれってよ」

「意地ってやつか？」

「いや」

それは否定する。違うというのだ。

「意地なんかじゃないさ。だって楽しいじゃないか」

「楽しい？」

「ああ、本当の姿を見た人って殆どいないんだろ？」

「まあそうだよな」

「いるってのはわかったけれどな」

それも今までの彼の行動からだ。幾ら何でも二度もルアーの糸を切るような魚はそうはいない。鯉でもそこまで大きくはないだろうからだ。

「御前はいるかどうかはどうでもいいんだよな」

「だから。それはもう言ってるじゃないか」

答える言葉にもやはり迷いはない。

「最初からってな」

「そうか」

「じゃああれか」

ここでクラスメイトの一人が言う。

「夢ってやつか」

「それは」

「そうだな」

そして彼もそれに頷くのであった。

「夢っていえば夢だな」

「タキタロウの魚拓を手に入れることがか」

「ああ、今日こそな」

目をキラキラと輝かせる。そこにこそ彼の意志があった。はっきりとした意志が。

「捕まえてやるさ、絶対にな」

「じゃあ明日は期待しているぜ」

「それでいいんだよな」

「ああ、そうしてくれ」

彼も言う。

「明日だ。絶対にな」

こうクラスメイト達に告げて意気揚々と湖に向かう。だがそこで彼が見たものは。

「これでも駄目か」

罨は壊されていた。中の餌だけ取られている。彼が用意した罨もタキタロウの力によって壊されていた。罨でも駄目だったのだ。

引き上げた壊された罨を見て彼は苦渋を浮かべるかというところではなかった。むしろだ。それでさらに戦意をあげるのであった。

「罨で駄目だったら」

湖を見て言う。そこにはタキタロウがいる。それははっきりとわかっている。

「今度は。何で捕まえてやろうかな」

拓樹は不敵に笑っていた。その不敵な笑みで湖を見据えている。彼は負けてはいなかった。勝負はまだ続いていた。それから逃げる気もなかった。意を決した顔で今度の勝負の方法を考えていた。ただそれだけであつた。だがそれを胸に秘めて湖を見る。それだけであつた。

タキタロウ

完

2008・1・19

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7664d/>

タキタロウ

2010年10月8日15時15分発行